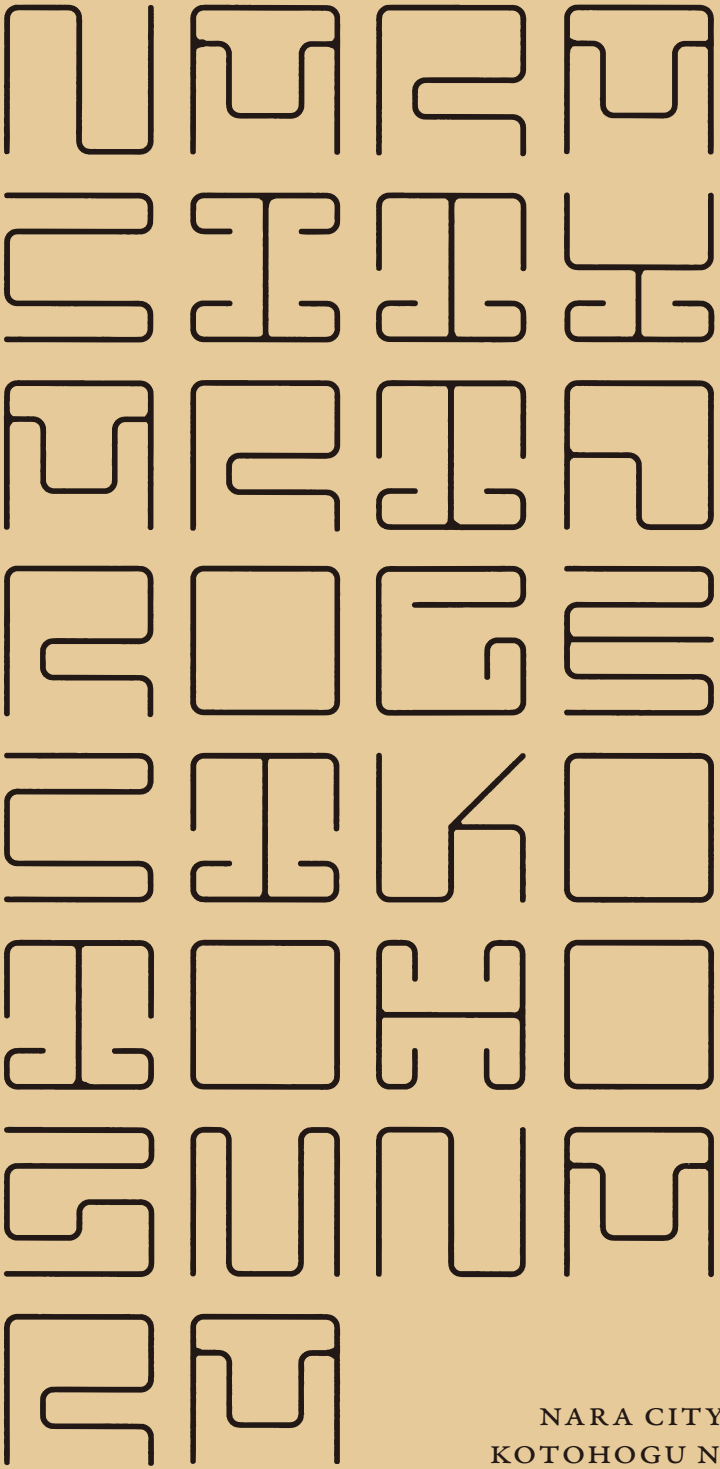


奈良市アートプロジェクト

古都祝奈良

2017–2020

NARA CITY ART PROJECT
KOTOHOGU NARA 2017–2020

# 奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良（ことほぐなら）２０１７－２０２０」

奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」は、１３００年にわたる歴史や文化が今に息づく奈良を舞台に、美術や演劇などの現代の表現を通じて、奈良に集う国内外の人びとと奈良で生活する人びとがともに体験しつくりあげるプロジェクトです。

目次


発刊によせて …… 4

古都祝奈良２０１７－２０１８ …… 6
チェ・ジョンファ「花 Welcome」 …… 8
青少年と創る演劇「ならのはこぶね」 …… 24

古都祝奈良２０１８－２０１９ …… 32
グリーン・マウンテン・カレッジ …… 34
チェ・ジョンファ「花の舎利塔 Blooming Matrix」 …… 42
青少年と創る演劇「ならのはこぶね」 …… 48

古都祝奈良２０１９－２０２０ …… 56
北澤潤「You are Me」 …… 58
青少年と創る演劇「奈良の夜の夢」 …… 72
グリーン・マウンテン・カレッジ …… 80
平田オリザさんによる演劇ワークショップ …… 84

古都祝奈良３年間を振り返って …… 88
プログラムディレクタープロフィール／事業概要 …… 91

# 発刊によせて

奈良市では、平成28年度に文化芸術プログラム「東アジア文化都市2016奈良市」を開催し、「古都奈良から多様性のアジアへ」をテーマに伝統文化から現代美術まで、美術・舞台芸術・食のほか多岐にわたる分野でプログラムを展開しました。特に、コア期間プログラム「古都祝奈良―時空を超えたアートの祭典」は、世界遺産でのアート展示や平城宮跡の野外演劇など、「場の力」を最大限に活かし、奈良の文化的な可能性を感じさせるものとなりました。

奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」はその成果を未来へと繋げていくべく、平成29年度から開催しています。「東アジア文化都市」で接した美術や演劇など創造性に富む現代的な表現活動は、時として地域の社会課題をあらわにさせます。奈良市ではこれらの事業を継続実施することで、未来に対して奈良が訴えていくべきこと、奈良がすべきこと、奈良だからできることを、掘り下げていきたいと考えています。

これまで美術プログラムでは西尾美也氏をプログラムディレクターに迎え、チェ・ジョンファ氏、小山田徹氏、北澤潤氏ら、国内外で活躍の美術家・アーティストの皆さまの参加を得て、市内各所でそれぞれの作品を展開いただきました。また、演劇プログラムでは「青少年と創る演劇」として、劇作家・演出家の田上豊氏が中高生たちと一から創作に取り組みました。さらに平田オリザ氏による演劇ワークショップなど、学びを得られるプログラムを多く実施していることが本事業の特徴のひとつでもあります。

本書は平成29年度から令和元年度まで3年間の事業成果を一冊にまとめたものです。それぞれの芸術家が、奈良に集う人々と奈良で生活する人々とともに創り上げた作品の数々をご覧いただき、「アート」という窓を通じて古都奈良の新たな可能性を感じていただければ幸いです。

最後になりましたが、本事業の実施にあたりご協力をいただきました多くの関係者の皆さまに、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

奈良市アートプロジェクト実行委員会 委員長
奈良市長

仲川げん

# 古都祝奈良 ― 2017-2018

「東アジア文化都市2016奈良市」の成果を引き継ぎ、新たな形でスタートした「古都祝奈良」。「東アジア文化都市2016奈良市」に参加した美術家や劇作家・演出家をプログラムディレクターに迎え、美術と演劇のプログラムを展開しました。

［開催プログラム］

美術展示&ワークショップ等

チェ・ジョンファ「花 Welcome」
（プログラムディレクター　西尾 美也）

演劇創作&公演 青少年と創る演劇「ならのはこぶね」
（プログラムディレクター　田上 豊）









p8／《花 Welcome ならまちセンター：Life》撮影：濱田 英明
p9／チェ・ジョンファポートレート、《花 Welcome ならまちセンター：Air 》撮影：濱田 英明

**チェ・ジョンファ「花 Welcome」**
会期：2018年3月9日（金）– 3月25日（日）
会場：奈良市役所 正面玄関ホール、ならまちセンター、See You（シーユー）奈良店、
奈良県立大学 4号館裏スロープ、柴田ビル〔3月18日（日）– 25日（日）〕



「古都祝奈良2017–2018」美術部門「花 Welcome」では、韓国を拠点に国際的に活躍する現代アーティストのチェ・ジョンファを招へいし、5つの会場での作品展示とワークショップ、アートディスカッションを行いました。

チェ・ジョンファは、「芸術や文化は、限られた人々のものではなく、だれにでも開かれている」ということを唱えており、日常生活のありふれたイメージや素材を使って、見なれた場所に新たな光景と価値を生みだす作品を、世界各地で作ってきました。

チェ・ジョンファは、自分が作っているものは「単に物質的な作品ではなく、ハーモニーだ」と言います。たとえば自然と人工、伝統的なものと現代的なもの、物質的なものと精神的なもの、美しいものと美しくないもの、こうした一見対立するもの同士が生み出すハーモニーです。










p10–11／《花 Welcome 奈良市役所》撮影：濱田 英明

ワークショップをとおして参加者とともに制作した作品が、春に咲く花のようにハーモニーを生じさせることで各会場を変容させ、今の生活について見つめなおす時空間へと私たちを誘う。そんな作品が奈良に咲き誇りました。

チェ・ジョンファ
1961年韓国ソウル生まれ、同在住。ベネチア・ビエンナーレ2005では韓国館の代表に選ばれたほか、リバプールやシドニー、台北、リヨンなど世界中の芸術祭に参加している。また、平昌（ピョンチャン）2018パラリンピック冬季競技大会では、開会式・閉会式の美術監督を務めるなど活躍の幅を広げている。近年参加の主な展覧会に、さいたまトリエンナーレ（2016）、ホノルル・ビエンナーレ（2017）、東アジア文化都市2017京都「アジア回廊 現代美術展」（2017）などがある。



《花 Welcome 奈良市役所》

チェ・ジョンファは、歴史ある神社仏閣に対する興味や探究心のみならず、いま現在を生きている人々が利用する「生活の場所」に深い共感をもちながら、奈良市内を視察しました。本作は、そうしたリサーチをもとに生まれた新作です。

チェ・ジョンファは奈良市の再生資源集積場で網に入ったペットボトルが積み重なっている様子を見て、「これこそがアートだ」と言いました。市民が使用したペットボトルが分別されてゴミに出されるというプロセスを介して、市民は自動的にこのアートの制作に関わっていると言えます。インテリアデザイナーでもあるチェ・ジョンファは、網に入ったペットボトルをシャンデリアとして蘇らせます。見慣れた素材を空間に浮かせ、光をあてるという単純な行為によっ



p12－13／《花 Welcome ならまちセンター：Life》撮影：濱田 英明

て、私たちの生活を改めて見つめる視点を浮かびあがらせます。

［解説：西尾 美也］

《花 Welcome ならまちセンター：Life》

本作は、チェコの首都プラハにある聖サルバトーレ教会でも展示された作品です。荘厳な空間に、一見意味のない風船をかけ合わせることで、ハーモニーを生み出しています。チェ・ジョンファは、吹き抜け空間に風船の大群を展示することで、ならまちセンターの空気を動かし、生きた空間にすることを提案しました。

チェ・ジョンファは、日頃から世界のさまざまな市場を巡って、作品に使える素材をリサーチしています。ツイスト風船は中国の工場で大量生産されている製品ですが、躍動感ある動きが「生」を象徴するものとして作品化されています。一方で、「時間が経過してしぼんでしまった風船



もまた美しいものだ」とチェ・ジョンファは言い、生きている風船と死んでいる風船が同時に存在することも、重要なハーモニーなのです。

［解説：西尾 美也］







p14右、15左／《花 Welcome ならまちセンター：Air》撮影：濱田 英明

《花 Welcome ならまちセンター：Air》

カラフルなザルは、韓国の家庭でキムチをつくる時に用いられるものです。チェ・ジョンファは、ならまちセンターのテラスから見える若草山と伝統的建築物を目にして、ザルのピラミッドを重ねることで新しいハーモニーを生み出そうと考えました。ザルという日用品を素材にするのみならず、ピラミッドの具体的なデザインや制作をすべてワークショップ参加者に委ねました。デザインを担当したワークショップ参加者は、ならまちでよく見られる格子戸をイメージした緑のラインと、元興寺をはじめとする社寺や家屋で見られる屋根をイメージした赤の三角形で図柄を構成しました。また、ワークショップに参加した小学校の児童約70名がザルを館内各所に配置して、ならまちセンターを彩りました。

［解説：西尾 美也］



p16-17／《花 Welcome See You（シーユー）奈良店》撮影：濱田 英明

《花 Welcome See You（シーユー）奈良店》

ハーモニーを生み出すためには、「どのような場所で展示するかが重要だ」とチェ・ジョンファは述べ、最も身近な日用品である衣服を扱うリサイクルショップに着目して、その吹き抜け空間に作品を展示することを提案しました。

チェ・ジョンファは「生活こそがアートだ」と主張しており、日頃から世界のさまざまな市場を巡って、作品に使える素材をリサーチしています。本作に使われているツイスト風船は、中国の工場で大量生産されている製品ですが、躍動感ある動きが「生」を象徴するものとして作品化されています。一方で、「時間が経過してしぼんでしまった風船もまた美しいものだ」とチェ・ジョンファは言い、生きている風船と死んでいる風船が同時に存在することも、重要なハーモニーなのです。

［解説：西尾 美也］








p18／《花 Welcome 奈良県立大学》
p19／《花 Welcome 柴田ビル》撮影：濱田 英明

《花 Welcome 奈良県立大学》

本作品は、2017年10月に奈良県立大学で開催された現代アート展「船／橋 わたす」で発表された作品です。ザルというだれもが見慣れた素材を用いるだけでなく、そのデザインをすべて学生に委ねました。4号館裏の使われなくなったスロープは、普段は学生でも目を向けない場所ですが、チェ・ジョンファが最も気に入った場所です。スロープの始まりは過去作品のパターンを引用し、新しい矢印のパターンを繋げることで、ここから新しく生まれ変わることを意図しました。ならまちの身代わり猿や、佐保川沿いに立ち並ぶお地蔵さん、船橋商店街のロゴマークなどをイメージしたパターンが続きます。古くからあったスロープが異世界へと通じる道に変換され、奈良県立大学から見える風景を再発見させてくれました。

［解説：西尾 美也］



《花 Welcome 柴田ビル》

チェ・ジョンファは奈良を視察した時に、人々の生活してきた歴史が堆積した光景を目にし、「未来の遺産である」と言いました。柴田ビルは古い佇まいの中で、新世代の入居者たちが美容院や衣料品店、喫茶店、染色工房を経営し、個々人の新しい歴史が積み重なり始めています。時を経た建物にカラフルなプラスチックを掛け合わせることで、ハーモニーが生み出されます。プラスチック容器は、市民から集めた使い終えたものと新品が組み合わされて構成されています。チェ・ジョンファは「芸術や文化は限られた人々のものではなくだれにでも開かれている」と一貫して唱えてきました。プラスチック容器というだれもが見慣れた素材









p20／《花 Welcome 柴田ビル》撮影：濱田 英明

を用いるだけでなく、制作のプロセスもワークショップとして市民に公開し、ワークショップ参加者は日用品を用いた造形と色彩の組み合わせを楽しみました。

［解説：西尾 美也］



**［関連プログラム］**

**ワークショップ1「Happy Happy」**
2018年2月20日（火）－3月8日（木）
10時－18時
会場：ならまちセンター 会議室1

**ワークショップ2「Happy Happy」**
2018年3月25日（日）13時－15時
会場：ならまちセンター 芝生広場

ワークショップ「Happy Happy」では、カラフルなザルや容器、風船など身近なものを使った作品を作りました。生活で使うものがワークショップ参加者の手を経て、見慣れた日常の景色を一変させました。

また、3月25日にならまちセンターで実施したワークショップでは、大小さまざまなプラスチックのフタを自由に並べ、芝生広場の上に花をいっぱい咲かせました。







**アートディスカッション**
**「生生活活（せいせいかつかつ） ― 生きることとアート」**
2018年3月25日（日）16時－18時
会場：cotocoto イベント・展示コーナー
（ならまちセンター1階）
ゲスト：チェ・ジョンファ（アーティスト）、
小山田 徹（美術家、京都市立芸術大学教授）
進行：西尾 美也（美術家、美術部門プログラムディレクター）

アートディスカッション「生生活活 ― 生きることとアート」では、チェ・ジョンファに加え、共有空間と対話をテーマに活動を展開する小山田徹をゲストに迎え、奈良におけるアートプロジェクトの可能性について、参加者と共に語り合いました。

チェ・ジョンファは、奈良は昔と今の空気が絶妙に混ざり合っており、街の規模も何をするにも適切な大きさ、だからこそ奈良に愛着が感じられると言います。また既に奈良にあるものは熟成されており、これから創っていくものも熟成することが出来る、芸術は昔のものと今のもの、そしてこれからのものを合わせていかなければならず、それは大都市ではない奈良だからこそできると語りました。

小山田徹は、現代美術は質問の芸術であると言います。新しい価値というのは対話の中から生まれてくるが、大都市のスピードでは心の余裕がないまま価値だけが先行する。奈良はゆっくりと構えじっくりと進んでいけば、いつのまにかそれが先端になると思うと、奈良でのアートプロジェクトの可能性に期待を寄せました。









p24-25／撮影：平岡 雅之

**青少年と創る演劇「ならのはこぶね」**

**オーディション**

2018年2月3日（土）、4日（日）

会場：ならまちセンター 多目的ホール（3日）、
なら100年会館 小ホール（4日）

**稽古**

2018年2月20日（火）–
3月29日（木）の16日間

会場：ならまちセンター 多目的ホール、
なら100年会館 小ホール ほか

**公演**

2018年3月30日（金） 14時開演

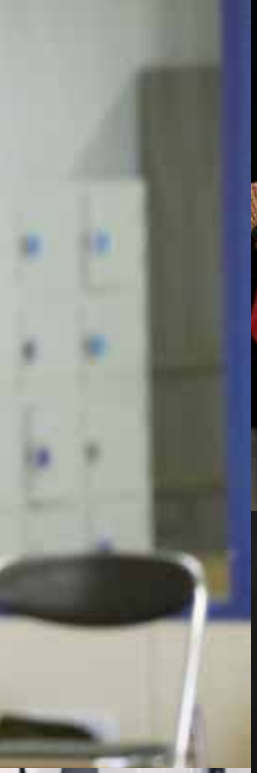
アフタートークセッション
（演出家 田上 豊 × 奈良市長 仲川 げん）

会場：ならまちセンター 市民ホール



青少年と創る演劇は、次代を担う若者が創作の過程を演劇のプロとともに経験することで、創造する喜びを体感し、その成果を発信するとともに、ふるさと・奈良を自らの言葉で語ることのできる人材の育成をめざすプログラムです。

春うららかな3月30日、オーディションで選ばれた中高生が2016年に上演されたオリジナル演劇「ならのはこぶね」に新しい演出を加えて、上演しました。「古都祝奈良2017–2018」演劇部門プログラムディレクターで劇作家の田上豊が演出し、中高生が一体となり稽古に励みました。参加者の中には演劇初心者も多く、はじめは出なかった大きな声や柔軟な動きも自主練習の努力と徐々に固まった仲間同士の結束により、本番公演では全ての力を出し切り、その立派な出演者たちの姿へ観客からは惜しみない拍手が










p26-27／撮影：平岡 雅之

送られました。

あらすじ

ときは、現代。学校で奈良（平城）時代の考察、再発見を促された高校生。教科書を地図代わりに読み進めて行くも、歴史に余白が多く実感に辿り着けない。劇化し発表することを指示された今、実感なしでは作品なんか無理！と大混乱。学年発表はもう近い！となりのクラス「平安時代」は豪華絢爛。焦りに焦る「平城」クラス。よりによってキーパーソンの鑑真役はずっと学校来てないし、クラスの仲も良くないし、どうなっちゃうの、私たち。歴史の海に漂い、小舟で浮かぶ高校生達。

私たちは、遣唐使。時代をまたぐ遣唐使。きっと戻ってきてみせる。

高校生達の歴史の冒険が、航海が、今始まる。



キャスト

生徒1……岡山 弥美
生徒2……東 未郷
生徒3……小阪 希空
生徒4……依藤 日向
生徒5……小田 つぐみ
生徒6……吉田 穂奈美
生徒7……山口 愛優理
生徒8……河内 侑美琳
生徒9……椿井 里奈
生徒10……浅野 花蓮
生徒11……堤 晴菜
生徒12……西村 百可
生徒13……松岡 夏来
生徒14……野田 菜摘
生徒15……中島 萌
生徒16……匠 夏歩
生徒17……林 奈央
日本史の先生……宮井 俊介

その他の登場人物

船頭、鹿の神、奈良の鹿たち、奈良時代の農民、里長（さとおさ）軍団、武装集団、僧侶（行基）、亡骸の運び屋、長屋王、













長屋王の側近、藤原四兄弟、聖武天皇、長屋王を捕らえる兵隊たち、遣唐使たち

スタッフ

作・演出……田上豊（田上パル）
演出助手……FOペレイラ宏一朗（プロトテアトル）、福田健二
舞台監督・美術……ニシノトシヒロ（BS-Ⅱ）
舞台監督補佐……北方こだち
音響……近松祐貴
照明……加藤直子（DASH COMPANY）
映像……吉光清隆（PLAYSPACE）
衣装……山口夏希
当日運営……三坂恵美（観劇三昧）



## 創作過程

2月初旬の2日間のオーディションにてそれぞれの個性や稽古への出欠予定状況等を考慮し、合否と配役を決定しました。この年は女性の参加が多かったため設定を女子高校にするとともに、役柄も人数に合わせて変更するなど新たな演出を加えた稽古を、2月下旬から始めました。出演者は自主練習も積極的に行い、日に日に演技に磨きがかかっていきました。

出演者のうち、演劇経験者・未経験者、中学生、高校生など、様々な立場で色々な思いがありましたが、みんなで相談や話し合い、稽古を繰り返し、「ならのはこぶね」の上演をめざしました。本番3日前から稽古場を上演会場に移し、さらに熱を帯びた稽古を重ね、出演者の顔つきもどんどんと俳優そのものとなっていきました。










参加者の声

演劇を作ることがこんなに楽しいことだと知れて良かった（中学生）

本番直前は緊張で少し泣いた。終わると安心と達成感と喜びで心の底からやって良かったと思った（中学生）

部活動では出来ないような殺陣や、大人数ならではの表現を体験することが出来て、しんどいこともふっとぶくらい楽しく勉強になった（中学生）

プロの指導はとても難しいものもあったが、みんなで協力して出来た達成感があった（中学生）

稽古で悩んだ時中学生のパワーやノリ、演出家のアドバイスで乗り越えられた（高校生）

今回出会った仲間は忘れません。皆と共演出来て楽しかった（高校生）

人見知りな性格で、はじめものすごく心配していたが、皆一所懸命で舞台が好きで色んな話をして「創らなければ」ではなく「この人達と創りたい！」と思うようになった（中学生）

舞台話で盛り上がったり、新しい情報をもらう良いコミュニティになったのは参加して良かったと思う点の一つ（中学生）

# 古都祝奈良

2018–2019

2回目の開催となる「古都祝奈良2018–2019」では、さまざまなテーマのもと繰り広げられるオープンな学び合いの場「グリーン・マウンテン・カレッジ」を開校。さらに、前回から継続して、韓国を拠点に国際的に活躍する現代アーティストのチェ・ジョンファによるワークショップと作品展示、中高生がプロの演出家とともに創り上げる演劇公演の、3つのプログラムを展開しました。

［開催プログラム］

対話型アートプログラム「グリーン・マウンテン・カレッジ」

美術ワークショップ&展示

チェ・ジョンファ「花の舎利塔 Blooming Matrix」

（プログラムディレクター　西尾 美也）

演劇創作&公演　青少年と創る演劇「ならのはこぶね」

（プログラムディレクター　田上 豊）









p34／第1回、p35右下／第6回　撮影：山口 健一郎
p35右上、左／第4回　撮影：衣笠 名津美

**対話型アートプログラム**
**「グリーン・マウンテン・カレッジ」**

グリーン・マウンテン・カレッジ開校に寄せて／小山田 徹（校長）

開校式では、学び合いの場を創る為に、先ずは焚き火を核に人々が集い出会う場と時間を皆で創出しましょう。焚き火は人類最古で最小で最強の共有空間です。緊急災害時にも有効に作用します。火をおこす技術や知識は太古の昔から人々が伝えてきた学びの原点です。

学びとは、自らの知識や経験を増



やすだけではなく、獲得したものを次世代へ伝えていくということまで含みます。つまり、今私が学ぶという事は、未来の子供達の為に学んでいるという事です。あらゆる生活の知恵や技術、様々な学問も伝える為に学ぶという事がベースにあります。ましてや美術もそうです。多様なものの見方や捉え方、感情の表し方、価値観の発見などは、表現や言説、態度などを通して人々と共有され、次世代、未来へと伝えられていきます。アートフェスで学びの場を作ることは、ある意味、必然なのです。

様々な事象を様々な方法で捉え、咀しゃくして自らのものとし、それを未来の他者へと手渡していく。文化というものの本質的な事を、今一度皆で一から作り出してみる。グリーン・マウンテン・カレッジの企画は、その様な持続的な価値の共有を目指した企画です。










p36右上、右下、左上／第1回　撮影：山口 健一郎、p36左中央、左下／第2回　撮影：衣笠 名津美
p37左上、右下／第3回、p37左下／第4回　撮影：衣笠 名津美

第1回 2018年10月13日（土）17時－20時
会場：ならまちセンター 芝生広場
火床を創る／小山田 徹

第2回 2018年10月21日（日）17時－20時
会場：JR奈良駅東口広場
男女と色恋／
山田 創平 × あかたちかこ × 小山田 徹

第3回 2018年11月17日（土）17時－20時
会場：奈良国立博物館 新館西側広場
大きな食卓／チェ・ジョンファ × 小山田 徹

第4回 2018年12月1日（土）17時－20時
会場：ならまちセンター 芝生広場
私はどこにいるの？地上編／
佐藤 知久 × 小山田 徹

第5回 2018年12月16日（日）17時－20時
会場：奈良公園 浮雲園地
私はどこにいるの？天空編／
磯部 洋明 × 松井 紫朗 × 小山田 徹



第6回 2019年2月2日（土）17時－20時
会場：ならまちセンター 芝生広場
耳を澄ます／sonihouse × 小山田 徹

第7回 2019年2月16日（土）17時－20時
会場：鳥見“ふらっと”まんま
繕う／柴田 美穂子 × 西尾 美也 × 小山田 徹

小山田 徹
１９６１年鹿児島県生まれ、京都府在住。美術家／京都市立芸術大学美術学部教授。１９８４年大学在学中に友人たちとパフォーマンスグループ「ダムタイプ」を結成。主に企画構成、舞台美術を担当し、国内外の数多くの公演に参加。「ウィークエンドカフェ」や「Bazaar Cafe」など、さまざまな友人らと造形施工集団を作り共有空間の開発を行う。











p38／第４回 撮影：衣笠 名津美
p39／第５回 撮影：衣笠 名津美

I

清々しい秋晴れの中、ならまちセンター芝生広場にてティピーテント横の薪ストーブに火がつき始めた頃、校長・小山田徹の挨拶からはじまった「グリーン・マウンテン・カレッジ」。多くの方が火を囲みひとときのおしゃべりを楽しんでいかれました。

2

趣ある近代建築のＪＲ奈良駅旧駅舎の前で行った2回目。都市社会学者・山田創平と思春期保健相談士・あかたちかこをゲストに、日々生活している中でなんとなく感じる、男女や家族にまつわるモヤモヤ感について、色々な思いや考えが聞こえてきました。

3

日没と同時に奈良国立博物館の新館西側広場にティピーテントとろうそくの火が灯ったころに始まった3回目のグリーン・マウンテン・カレッジ。チェ・ジョンファをゲストに迎え、ワークショップで新旧の食器や食卓を積み重ねた塔の作品「花の舎利塔 Blooming Matrix」を制作したことにちなみ、「大きな食卓」と題して、参加者皆で食べものを持ち寄り、食卓を囲みました。



4

4回目のテーマは、「わたし」が存在する場所や関係性について考えてみるということ。時間も空間も長大なスパンで人間を捉える宇宙人類学の話を、ならまちセンター芝生広場の広い夜空の下、ゲストの文化人類学者・佐藤知久と参加者が共に楽しみました。

5

奈良公園浮雲園地にて行った5回目のグリーン・マウンテン・カレッジ。宇宙物理学者の磯部洋









p40／第６回 撮影：山口 健一郎
p41／第７回 撮影：衣笠 名津美

明による広大な宇宙の話や、美術家・松井紫朗の「手に取る宇宙―Message in a Bottle」の体験など、「宇宙から見たわたし」に思いを馳せました。

6

６回目は「耳を澄ます」がテーマ。sonihouseのオリジナルスピーカーscenery」を会場に設置し、焚き火の中で薪が爆ぜる音をＢＧＭにゲストの話が展開しました。話が続く間も、自然な優しい音が耳の周りに聞こえる12面体スピーカーの音はとても心地良く感じられました。

7

７回目は「繕う」をテーマに、洋裁師・柴田美穂子と美術家・西尾美也をゲストに迎え、鳥見〝ふらっと〟まんまで開催。ゲストの話の後、ボタンホールを補強する「かんぬき止め」を教わりながら、フェルトにボタンを付けてティッシュケースを作りました。黙々と真剣に手を動かす人、手を動かしながら軽やかにお話する人など思い思いに洋裁とお話の時間を過ごしました。

※グリーン・マウンテン・カレッジは、アメリカのノースカロライナで開設された伝説的な芸術の学校「ブラック・マウンテン・カレッジ」から着想を得て発案されました。1933年から24年間ほど開設されたこの学校は、音楽家のＪ・ケージ、振付師のＭ・カニングハム、建築家のＢ・フラー、現代美術作家のＲ・ラウシェンバーグなど多様でそうそうたる講師陣が集結し、相互学習的で実験的な学びの場が模索されました。異なる思想、理論、技術を共有する横断的な文化的実践の拠点として、その後の文化・芸術の展開に多大な影響を与えています。








p42–p43／奈良国立博物館での展示風景、ワークショップの様子　撮影：衣笠 名津美

**チェ・ジョンファ**
**「花の舎利塔 Blooming Matrix」**
**ワークショップ**
2018年11月17日（土）14時–16時
会場：奈良国立博物館 新館前北側通路

**展示**
①2018年11月17日（土）–18日（日）
会場：奈良国立博物館 新館前北側通路

②2018年11月20日（火）–29日（木）
会場：なら100年会館 2階正面バルコニー









p44／奈良国立博物館での展示風景
p45／なら100年会館での展示風景 撮影：衣笠 名津美

「花の舎利塔 Blooming Matrix」では、参加者が新旧の食器や調理道具、食卓などを積み重ねて、複数の塔を制作しました。

食べることは昔も今も変わらずに人間が続けてきた基本的な営みです。そのために人間が生み出してきたさまざまな道具を、チェ・ジョンファは「枯れない花」だと言います。それらの「花」が積み重なって咲き誇る塔＝マトリックス（ものごとの基盤）は、過去と現在、未来をつなぐハーモニーを生じさせ、いまの生活について見つめ直す時空間へと私たちを誘います。

［解説：西尾 美也］



p46右／撮影：衣笠 名津美

**[関連プログラム]**
**アウトリーチワークショップ**
2018年11月19日(月)10時－11時30分
会場：奈良市立富雄保育園





p48-p49／撮影：平岡 雅之

**青少年と創る演劇「ならのはこぶね」**
**オーディション**
2018年9月22日(土)、23日(日・祝)
会場：北部会館市民文化ホール 多目的室1

**追加オーディションおよび配役発表、**
**事業説明会**
2018年10月16日(火)
会場：ならまちセンター 会議室2、3

**基礎練習**
2018年11月6日(火)、13日(火)、14日(水)、16日(金)
会場：奈良市役所 正庁(6日)・第6北会議室(13、14、16日)

**稽古**
2018年12月11日(火)－22日(土)の11日間
会場：ならまちセンター 多目的ホール・市民ホール、音声館 ホール

**公演**
2018年12月23日(日・祝)14時開演
会場：ならまちセンター 市民ホール



平成最後の天皇誕生日となった12月23日「ならのはこぶね」第3回公演を行いました。

キャストの約半数が演劇初心者となった今回、学校も学年も違う中学生8人と高校生13人の計21人が、田上豊による稽古指導のもと、本公演に臨みました。また今回新たな試みとして、クリエイションスタッフが加わり、演出助手、制作、音響担当として3人が公演をプロとともに支えました。

3年度にわたりキャストを変えて演じられたオリジナル演劇「ならのはこぶね」は、ここに集大成を迎えることとなりました。

あらすじ

ときは、現代。学校で奈良（平城）時代の考察、再発見を促された高校生。教科書を地図代わりに読み進めていくも、歴史に余白が多く実感に辿り着けない。劇化し発表することを指





p50-p51／撮影：平岡 雅之

示された今、実感なしでは作品なんか無理！と大混乱。学年発表はもう近い！となりのクラス「平安時代」は豪華絢爛。焦りに焦る「平城」クラス。よりによってキーパーソンの鑑真役はずっと学校来てないし、クラスの仲も良くないし、どうなっちゃうの、私たち。歴史の海に漂い、小舟で浮かぶ高校生達。私たちは、遣唐使。

時代をまたぐ遣唐使。きっと戻ってきてみせる。

高校生達の歴史の冒険が、航海が、今始まる。

キャスト

生徒1……万徳 充穂
生徒2……植村 真央
生徒3……政清 亜季
生徒4……松本 亜依
生徒5……太田 裕佳
生徒6……片山 真奈
生徒7……上野 夏鈴
生徒8……田辺 美海
生徒9……依藤 日向
生徒10……坂田 朋哉
生徒11……山田 莞爾
生徒12……松下 奈央
生徒13……桐畑 凪沙
生徒14……桐畑 美里
生徒15……岡山 弥美
生徒16……浅田 玲子
生徒17……吉田 らら
生徒18……阪田 日和
生徒19……村井 萌
生徒20……三木 ひまわり
日本史の先生……山村 愛莉

その他の登場人物

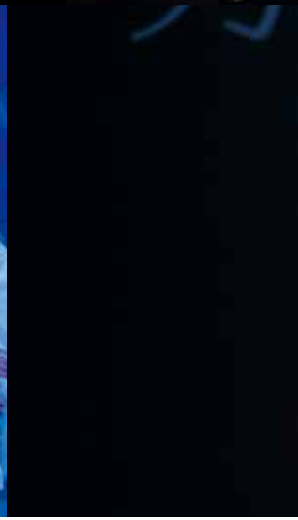
船頭、鹿の神、奈良の鹿たち、奈良時代の農民、里長（さとおさ）軍団、武装集団、僧侶（行基）、亡骸の運び屋、長屋王、長屋王の側近、藤原四兄弟、聖武天皇、長屋王を捕らえる兵隊たち、遣唐使たち









p52／撮影：平岡 雅之

クリエイションスタッフ
野田 菜摘、嶺川 観音子、三輪 くるみ

スタッフ
作・演出……田上 豊（田上パル）
演出助手……福田 健二
舞台監督・舞台美術……ニシノトシヒロ（BS-Ⅱ）
舞台監督補佐……北方 こだち
音響……廣岡 美祐（劇団「劇団」）
照明……加藤 直子（DASH COMPANY）
映像……吉光 清隆（PLAYSPACE）
衣装……山口 夏希
当日運営……三坂 恵美（観劇三昧）
スペシャルサンクス……新居 達也、井上 大輔、中村 恵、奈良県高等学校演劇研究会

創作過程
9月 出演者オーディション
奈良の中学生、高校生を中心に出演者を広く募集。半数近くは演劇未経



験者という、今回の出演者が決定。
11月 演劇基礎練習
出演者は学校も学年も様々。稽古に先駆けて、出演者同士をよく知ることと演劇の基礎を身に付けるべく、練習に励んだ。
12月 本稽古
今までになく短期集中の稽古期間。みんなで意見を出し合い、それぞれが持つ課題にチャレンジし、仲間に支えられた11日間。









## 参加者の声

大勢の前で話すのが苦手で克服したいと思い参加した。本稽古が始まると恥ずかしがらず思いっきりやっている人がとてもカッコよく私も堂々とやったら本当に楽しくて稽古が楽しみになった。友人や先生に沢山褒めてもらえて嬉しかった。中々ない機会、参加して良かった。（中学生）

二週間でこんなに人と仲良くなれるのは発見だった。この舞台に出会えて嬉しかった。また新しいことに挑戦したい。（中学生）

とても大変で楽しくて忙しかったが、終演後は興奮度ＭＡＸで達成感は言葉に出来ない。（中学生）

舞台を通じてコミュニケーションの大切さ、伝えることの難しさを教えてもらった。奈良の歴史文化、この仲間をとても好きになれた時間だった。（中学生）

役を演じ終えてこの歴史ある奈良に住めてよかったと思う。これからも奈良の良いところをどんどん見つけたい。（中学生）

初心者の私には稽古はきつく泣いてしまって迷惑をかけたり、本番が近付くにつれ緊張が増しセリフが言えなかったり行きたくないと思うこともあった。だが笑顔を心掛けたり時間の使い方を工夫したりと努力をしたので、14年間で最も大きな達成感だった。（中学生）

# 古都祝奈良 2019-2020

3度目の開催となる「古都祝奈良2019-2020」では、インドネシアを拠点に活動する美術家・北澤潤が奈良のまちなかでインドネシアの日常の事物を用いたアートプロジェクトを展開。また、演出家・田上豊が中高生とともにつくりあげる演劇は、新たな作品に挑みました。さらに、前回に引き続き開校する、美術家・小山田徹発案のオープンな学び合いの場「グリーン・マウンテン・カレッジ」や、劇作家・平田オリザによる演劇ワークショップといったラーニング・プログラムも並行して開催しました。

［開催プログラム］

アーティスト・イン・レジデンス&美術展示
北澤潤「You are Me」
（プログラムディレクター　西尾 美也）

演劇創作&公演　青少年と創る演劇「奈良の夜の夢」
（プログラムディレクター　田上 豊）

対話型アートプログラム「グリーン・マウンテン・カレッジ」
平田オリザさんによる演劇ワークショップ











p58上／《ロスト・ターミナル》撮影：米田真也、下／《地球の鳥かご》撮影：衣笠 名津美、
p59上／《ノーウェア・オアシス》、下／《ひとときのミュージアム》 撮影：衣笠 名津美、
左／北澤 潤《Trace Drawing - Shopping street and Pasar》

**北澤潤「You are Me」**
2020年1月10日（金）－2月1日（土）
会場：ならまちセンター、春日大社大宿所、
餅飯殿センター街、さるさわ遊歩道、
平城宮跡 朱雀門ひろば　ほか

アーティスト・イン・レジデンス&美術展示プログラムとして、インドネシアを拠点に活動するアーティスト北澤潤を招へいし、インドネシアの事物を創造的に据え直すことで生まれた5つのプロジェクトを奈良に持ち込みました。異国の日常の時間や風景が重なるひとときを体験しながら、身近にいる「他者」との違いと共に過ごし、そこにある微かな



重なりを見いだして楽しむ機会をつくりだすことを試みました。

会期中は北澤とともに共同でプロジェクトを行うメンバーが、インドネシアと国内から集い、奈良に滞在し、プロジェクト運営を支え盛り上げました。

あなたはわたし／北澤潤

目の前に、国籍も言語も肌の色も異なる人がいる。相手も同時にそう感じていることだろう。どこから来たの？留学？仕事？そう聞かれるし、聞きたくもなる。あなたの街に、国に、社会にわたしがいるとき、わたしは異質で特殊で言葉足らずな他者になる。わたしは、あなたの「あなた」になる。逆もまた然り、なのかもしれない。けれどわたしが2つの街を、国を、社会を同時に、「わたしの」だと感じていたとしたらどうだろう？どちらにいたって、わたしは「あなた」とされる。逆に言えば、











p60／北澤 潤《Trace Drawing - Shopping street and Pasar》
p61／オープニングイベント 撮影：衣笠 名津美

どこにいても「あなた」で居続けるのが、もはや「わたし」になっている。ややこしくなってきた。ではもしも、遠く離れた街が、文化の異なる2つの国が、同時にIつとして存在していたら？「ダブルな社会」がありえたとしたら？その時そこにいるすべての「あなた」は「わたし」になる。

北澤 潤
美術家。1988年東京生まれ、ジョグジャカルタ拠点。合同会社北澤潤八雲事務所代表、STUDIO BELIMBINGディレクター。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。さまざまな国や地域でのフィールドワークを通して「ありえるはずの社会」の姿を構想し、多様な人びととの立場を越えた協働によるその現実化のプロセスを芸術実践として試みる。2016年に米経済誌フォーブス「30 Under 30 Asia」アート部門選出。

プロジェクトメンバー
アニーサ・プトゥリ・チンデラカシ
建築家。「Frog House Community Space」などで数々の建築プロジェクトを手がける。

ムニフ・ラフィ・ズディ
アーティスト。主に版画を軸にした作品を制作。

エレオノラ・A・ユアニタ
アートマネジメントが専門で、ジョグジャカルタでさまざまなアートイベントやギャラリーの運営に携わる。

ミヤタユキ
美術家。2013年に茨城県常陸太田市に移住。様々な領域を横断しながら活動している。









p62右／《地球の鳥かご》、左上／《フラグメンツ・パッセージ》撮影：衣笠 名津美、
左下／《フラグメンツ・パッセージ》撮影：米田 真也
p63右下／《フラグメンツ・パッセージ》撮影：衣笠 名津美、右上、左／《フラグメンツ・パッセージ》撮影：米田 真也

津田 翔平
現代美術家、実験建築家、グラフィックデザイナー、ノイズレーベル UNNOISELESS 主宰。

菊池 政也
菊池建築工業三代目棟梁。2013年より美術館や地方芸術祭などでアーティストとの共同制作を重ねる。

**[関連プログラム]**

**アーティストと巡る作品鑑賞ツアー**
2020年1月10日（金）16時–17時
会場：ならまちセンター、春日大社大宿所、
餅飯殿センター街、さるさわ遊歩道

**オープニングイベント**
2020年1月10日（金）17時–18時
会場：春日大社大宿所
出演：アンクルン音楽クラブ con brio

《フラグメンツ・パッセージ》

インドネシアの伝統市場「パサール」の雑多な空間と、ジャワ人たちの見返りなしにモノを他者に分け与える文化から着想された作品。「おすそわけ」によって日々変化しつづける仮設の市場が春日大社大宿所に出現しました。

オープン当初はインドネシアからやってきた見慣れない日用品のみが並んでいた空間に、徐々に訪れた人びとによって持ち込まれた日本のモノが入り混じっていきます。会期中盤には2つの国のモノで溢れた市場が出来上がり、プロジェクトメンバーとのやりとりを介して、モノの行き来が活発化していきました。誰かからのモノが巡りめぐって、お金を介さず自分の手元にやってくる感覚。買い物客で賑わう商店街の中にあっ



p64-p65／《地球の鳥かご》撮影：衣笠 名津美

たことで、モノを手に入れた人たちは喜びと同時に驚きの表情を浮かべていました。

［解説：北澤 潤］

《地球の鳥かご》

ジャワ島の街の路地には、あちこちに鳥かごがぶら下がっていて、夜になるとその一つひとつを布で覆う習慣があります。《地球の鳥かご》は、その景観や日常的な習慣を利用し、都市生活の中で人間と動物との境界線にある「ケージ＝籠／檻」に「地球」を重ね合わせることで、あなたもわたしも鳥と等しく、地球に生きる動物であることを思い起こさせようとします。

ジャワ島で鳥を育てる人たちに実際に使用されていくことを目標に、2017年にはじまったこのプロジェクトが奈良の路地へとやってきました。インドネシアの職人が作ったさまざまな形状の鳥かごに、地球の柄の布を被せた《地球の鳥かご》を持ち込み、商店街から猿沢池へと通じる路地にインスタレーション作品として展開しました。

［解説：北澤 潤］







p66-p67／《ノーウェア・オアシス》撮影：衣笠 名津美

《ノーウェア・オアシス》

古都ジョグジャカルタの日常を象徴する、シートに覆われた屋台「アンクリンガン」。その内部での人々の会話や体づかいは互いに近しく、同時に自由で、時間がゆるやかに流れています。

《ノーウェア・オアシス》は、シートの内と外にジョグジャカルタの路上風景がプリントされた特製のアンクリンガンを制作し持ち込むことで、異国の時空間を出現させます。そこは、ルールに守られた日本の都市空間の中で、どこにもない（no where）が、同時にたしかにいまここ（now here）にある「オアシス」となるでしょう。

会期中、商店街の複数カ所に日々出没し、インドネシア人のプロジェクトメンバーたちが中心となり運営したアンクリンガン。作品を見にきた人、道行く人、常連さん、それに奈良をはじめ大阪・京都といった関西圏に住むインドネシアからの移住者や留学生といった人たちが、共に集いあう場となっていきました。

［解説：北澤 潤］








p68／《ロスト・ターミナル》撮影：衣笠 名津美、p69右上、右下／《ロスト・ターミナル》撮影：米田 真也
p69左／《ひとときのミュージアム》撮影：衣笠 名津美

《ロスト・ターミナル》

街角に突如現れた、インドネシアの路上を走る三輪タクシー「ベチャ」。この乗り物のルーツは日本から現地に持ち込まれた「輪タク」だと言われています。奈良の観光を象徴する「人力車」もまた、明治時代にアジア諸国に輸出され、その名残のまま「リキシャ」や「リクショー」と呼ばれ各国で親しまれています。今回やってきた見慣れない乗り物、ベチャたちは、本当に私たちにとって異質でエキゾチックな存在なのでしょうか？《ロスト・ターミナル》は、異国の日常を行き交う乗り物を持ち込み、実際に使える状況を生み出していくことで、かつて日本にもあった失われた路上の光景を現代社会に描きなおし、国や時間の隔たりを越えていきます。

会期中の土日祝日に、ならまちセンターと猿沢池の外周でベチャを運転する試乗会をひらきました。また、



奈良の人力車とベチャを乗り比べるイベントも開催。まさに「You are Me」を象徴する瞬間が生まれました。

［解説：北澤 潤］

**［関連プログラム］**
**ベチャ＆人力車の試乗会**
2020年1月25日（土）10時30分–12時
会場：ならまちセンター 芝生広場
ゲスト：西條 功也（観光人力車 やまと屋奈良 車夫）








p70右上、中央、右下／《ひとときのミュージアム》　撮影：衣笠 名津美
p71／北澤潤ドローイング展 撮影：米田 真也

《ひとときのミュージアム》

平城宮跡でアルファベットが描かれた凧を参加者みんなで飛ばし、風景に「ひととき（momentary）」のメッセージを掲げました。ジャカルタ製の凧は揚げることすら難しく、メッセージが楽しくも儚く浮かび消える様子は、ジャカルタの即興的で混沌とした文化への賛美を表現しているかのようでした。

［解説：北澤 潤］

**［関連プログラム］**
**北澤潤ドローイング展**
2020年1月10日（金）– 2月1日（土）
会場：mellow cafe










p72-p73／撮影：平岡 雅之

「古都祝奈良2019-2020」は、中高生が田上豊とともに新たな作品「奈良の夜の夢」を創作、上演しました。出演者21人、クリエイションスタッフ2人、計23人の参加者のうち7人が演劇未経験者、10人がこれまでの青少年と創る演劇参加者、6人が部活動での演劇経験者で、また年齢も学校も違うなか、一つの作品を創り上げていくための仲を深め、約5か月間にわたるプログラムをや

**青少年と創る演劇「奈良の夜の夢」**
**演劇体験ワークショップ**
2019年8月3日(土)、4日(日)
会場：ならまちセンター 多目的ホール

**創作入門ワークショップ**
2019年9月7日(土)、8日(日)
会場：ならまちセンター 多目的ホール



**基礎練習**
2019年9月19日(木)、26日(木)、10月6日(日)、13日(日)
会場：ならまちセンター 多目的ホール

**配役オーディション＆事業説明会**
2019年10月27日(日)
会場：ならまちセンター 多目的ホール

**プレ稽古**
2019年11月18日(月)、19日(火)、20日(水)
会場：なら100年会館 小ホール（18日）、ならまちセンター 多目的ホール（19、20日）

**稽古**
2019年12月3日(火)-20日(金)の16日間
会場：ならまちセンター 多目的ホール（3日-17日）・市民ホール（18日-20日）

**公演**
2019年12月21日(土)14時開演
アフタートークセッション
（演出家 田上 豊×奈良市長 仲川 げん）
会場：ならまちセンター 市民ホール





p74–p75／撮影：平岡 雅之

り抜きました。

本番公演では、田上作品特有の軽快なテンポ、遊び心満載の演出と参加者のエネルギーとチームワークがタッグを組み、これまでの稽古の成果を存分に発揮するような堂々とした演技で観客を魅了、「奈良の夜の夢」初演は盛況のうちに終演することができました。

あらすじ

時は8世紀。巨大な仏像の完成が目前に迫り、開眼供養に向けて大いに盛り上がる都。悲願達成に万感の想いの上皇の元へ、一組の貴族が「結婚」の相談にやって来て…。シェイクスピアの名作「夏の夜の夢」に奈良の文化的エッセンスを取り入れた新しい物語がここに誕生する。



キャスト

聖武上皇……小林 良駿
光明皇太后（こうみょうこうたいごう）……隅野 由梨
津守通（つもりのとおる）……嶺川 観音子
礼讃太（らいさんだ）……髙木 創太
出見取安（でみとりやす）……越智 隼斗
葉宮（はみや）……赤瀬 怜
経怜奈（へれな）……堤 晴菜
うぐいす……若林 萌恵
カラス……吉田 穂奈美
ふくろう……山口 愛優理
とき……上村 まい
らいちょう……浅野 花蓮
あかうそ……依藤 日向
孝謙天皇……松下 奈央
白（はく）……米谷 侑美琳、河崎 匡亮
絵馬……早田 美帆
大和……織田 千聖
わらび……櫻井 佳奈
飛鳥……西脇 愛梨
金魚……田辺 美海









クリエイションスタッフ
浅田 玲子・今本 千穂

スタッフ
翻案台本・演出 田上 豊（田上パル）
演出助手……福田 健二
舞台監督・美術……ニシノトシヒロ（BS-Ⅱ）
舞台監督補佐……北方 こだち
音響……廣岡 美祐
照明……加藤 直子（DASH COMPANY）
映像……吉光 清隆（PLAYSPACE）
映像オペ……上原 優香
衣装……山口 夏希
当日運営……一般財団法人奈良市総合財団（ならまちセンター）

スペシャルサンクス……新居 達也、井上 大輔、中村 恵、奈良県高等学校演劇研究会



創作過程

8月 演劇体験ワークショップ
初顔合わせのこの日。ゲーム形式のワークショップで参加者同士の仲を深めた。演出家から「演劇をする上で一番大事なことは、相手のことをよく知ること！」とアドバイス。

9月 創作入門ワークショップ
シェイクスピア「夏の夜の夢」を読んで臨んだ作品創作。奈良版にするためのアイデアを出したり、原作のワンシーンを10代の参加者の言葉で書き換えたり…、バラエティ豊かな発想で稽古場に笑い声が響いた。

9－10月 演劇基礎練習
参加者の約半数は演劇未経験者。観客に見せる意識、見られる意識を養うため、県内で演劇普及活動をしているナ・LIVE実行委員会の新居達也らの指導のもと、発声練習や即興表現を中心に練習を重ねた。ま









た参加者同士が意見を出し合って話し合いも重ねた。

11月 プレ稽古・配役決定

参加者のアイデアを演出家がまとめあげ、いよいよ「奈良の夜の夢」翻案台本が完成。数日間に及ぶ配役決め稽古ではさまざまな配役パターンを試し、参加者の特性を最大限に活かせる配役が決定。

12月 本稽古

初演作品ならではのオリジナリティを最大限にみせられるよう、毎日毎日稽古に励んだ。

参加者の声

活動が終わってこれから何を目標に過ごそうかわからないくらい、本稽古の2週間が充実していて、学ぶことが多かった。（中学生）



毎日稽古に行くたびにかなりの進展があり緊張感があったが、稽古の時間はその緊張感も上回る楽しさで明るい気持ちで通えた。（中学生）

「自分で思い描いた自分を再現する」「アイデアを出し合い、プロとともにブラッシュアップする」「人から信頼される、期待される」「全員が積極的に楽しんでいる」という状況が稽古の楽しさの要素の一つだと思う。単に友達と話す楽しさとは違う「厚みのある楽しさ」を感じた。（中学生）

アイデア出しは難しかったが、複数人でやると思いもしなかったような意見がぽんぽん出てきて、知らないうちに面白いものが出来た。（中学生）

本番が終わった翌日もみんな変わらずSNSで話している、という経験は初めてでとても嬉しい。（中学生）







p80／第1回、
p81上／第1回、下／第2回

**対話型アートプログラム**
**「グリーン・マウンテン・カレッジ」**
会場：ならまちセンター 芝生広場

第1回 2019年9月29日(日)18時-20時
学び合い 他者の生活を想像する／小山田 徹

第2回 2019年11月17日(日)18時-20時
学び合い 個々の関係をつくる「移住」／
平田 オリザ × 小山田 徹

第3回 2019年12月21日(土)18時-20時
学び合い 他者の人生を演じる「演じる」／
田上 豊 × 小山田 徹

第4回 2020年1月26日(日)18時-20時
学び合い 他者の思考を知る「シェアリング」／
北澤 潤 × 西尾 美也 × 小山田 徹



1

1回目はカレッジ校長の小山田徹がこれまで行ってきたプロジェクトや活動の話を通して、なぜ、どのように共有空間を作ってきたか、また、共有空間を通じて他者との関係性をどう育むか、時に震災時には屋台やたき火が有効なツールであることなどを話しました。

2

2回目は日本の現代演劇を牽引する劇作家・演出家である平田オリザをゲストに迎え、「移住」をテーマに開催。平田が移住する豊岡、城崎温泉での演劇の話、また二人とも大学で芸術教育に携わっていることから話題は「大学と演劇」にまで及ぶものとなりました。

3

青少年と創る演劇「奈良の夜の夢」上演日の12月21日の夜に開催された









p82／第４回 撮影：山口 健一郎
p83／第３回

３回目、ゲストはその翻案台本・演出を担った田上豊。「演じる」をテーマに、演劇参加者の皆さんや、過去に参加したＯＢ、ＯＧが集まり、作品創作過程を経て実感した話などで盛り上がりました。

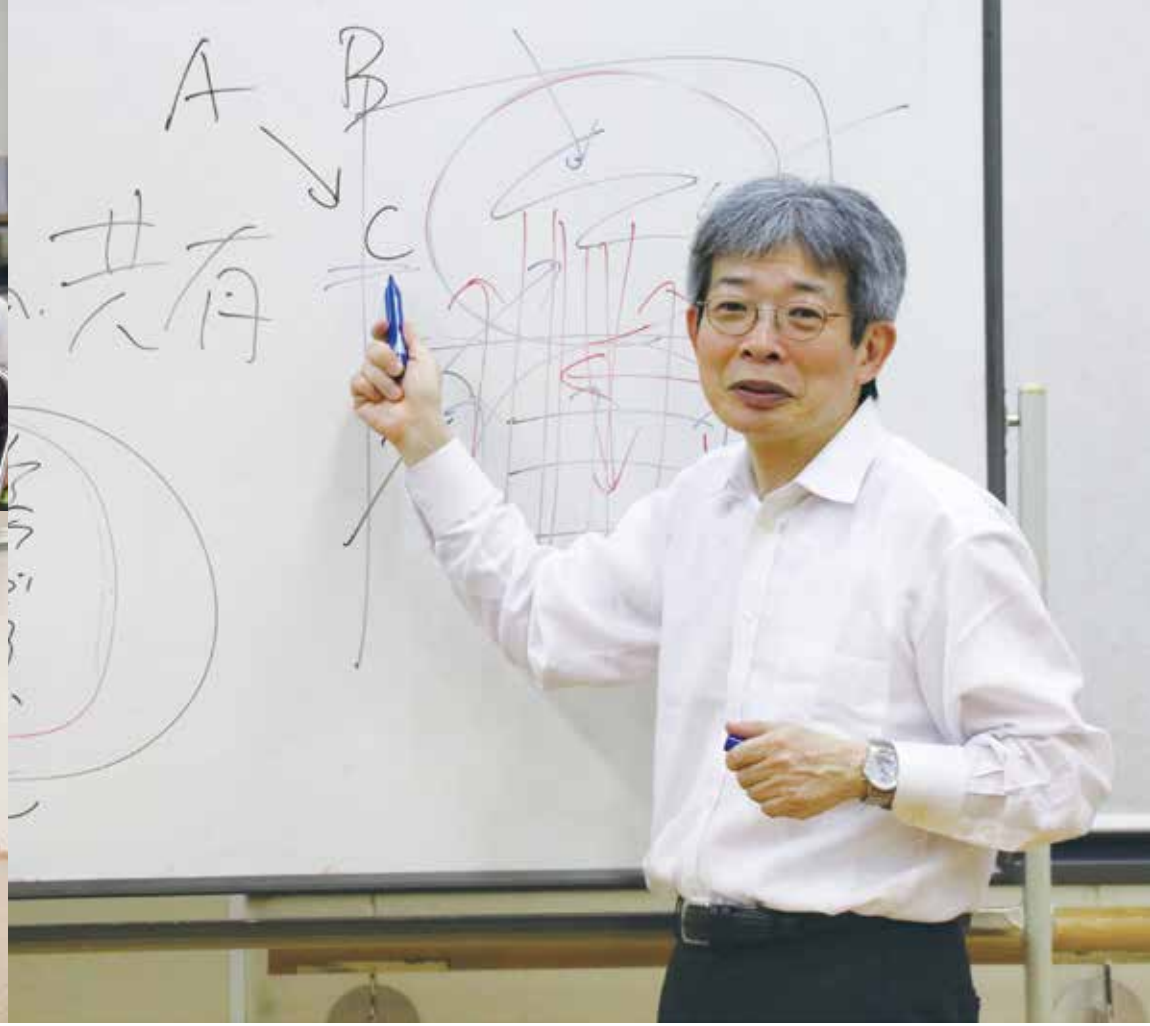
4

４回目のゲストはアーティスト北澤潤と「古都祝奈良」プログラムディレクター西尾美也。西尾ディレクターのこのプロジェクトへの思い、また、北澤が現在拠点としているインドネシアで感じたカルチャーショックの話も展開。「シェアリング」というテーマに関しては、北澤が「自分の中に元々ある感覚をシェアしようと訴えているのが今回の作品たちです」と話していたのも印象的でした。










**平田オリザさんによる演劇ワークショップ**
2018年1月23日（火）17時－20時
会場：ならまちセンター 多目的ホール

2018年8月20日（月）18時30分－21時
会場：なら100年会館 小ホール

2019年11月17日（日）10時－13時 中高生対象、14時－17時 一般（18才以上）対象
会場：ならまちセンター 多目的ホール

「東アジア文化都市2016奈良市」舞台芸術部門ディレクターの平田オリザによるワークショップは2016年にはじまり、続く奈良市アートプロジェクトでも3年に亘り開催しました。教育者としても幅広く活躍する平田の指導は、ゲームやロールプレーを通じてイメージの共有の大切さや円滑なコミュニケーションの理解など、若者から高齢者



まで年代を問わず気付きを得られます。演劇に携わる方のみならず、教育関係者や医療従事者、また日常生活においても大いに参考になると、毎回、参加者満足度の大変高いプログラムとして好評を博しています。

平田 オリザ
劇作家・演出家・「青年団」主宰。こまばアゴラ劇場芸術総監督・城崎国際アートセンター芸術監督。1962年東京都生まれ。国際基督教大学教養学部卒業。大阪大学COデザインセンター特任教授、東京藝術大学COI研究推進機構特任教授、その他多数の機関で役職を務める。主な著作に、『演劇入門』（講談社現代新書）、『芸術立国論』（集英社新書）、『わかりあえないことからコミュニケーション能力とは何か』（講談社現代新書）、『下り坂をそろそろと下る』（講談社現代新書）。








参加者の声

自身の進路の参考になった。前からコミュニケーションへの関心は高かったがより強くなった。（10代）

教育的観点からの話も多くためになった。皆楽しくわいわいとやれた。（20代）

仕事に役立つ示唆を色々いただけた。（30代）

普段意識していない事を考える機会を得られた。（30代）

自分から発信することの大切さ、しないと相手に伝わらないと思った。（70代）

劇や演じることのイメージがちょっと変わった。（10代）



多様な考え方があることを実感。何事も決めつけないように心がけたい。（50代）

文化や背景を前提に言葉を捉えなければいけないと深く思った（40代）

日常生活でぶつかること、これから考えていくことを感じるワークショップ。（30代）

年代や背景でイメージが異なったり、同じ言葉でも意味が変わるなど、仕事にも通じる。（20代）

# 奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」3年間を振り返って

プログラムディレクター（美術）
西尾 美也
（美術家・奈良県立大学准教授）

過去3年間のプログラム構成には、以下のような意図がある。I年目は日用品というモノを用いた親しみと驚きを伴う入門編であり、その制作プロセスの中で参加型という手法を取り入れた。2年目は、焚き火と学びというコトだけに振り切ったプログラムで、アートの根源的な意味を問い直した。3年目は応用編と位置づけて、複数のモノを同時展開しながらその中でコトを起こしていく、アートプロジェクト（AP）の先端的表現を試みた。

本事業の実行委員会事務局は奈良市が担っているが、I年目は市の職員の態度に疑問を感じる場面が多かった。ディレクターやアーティストへの「発注」で予定調和的なAPを作ろうとしている感じがしたからだ。プロジェクトが「投げかける」ことを意味する通り、APはその実践を通して、あり得たかもしれないモノゴトを提示する。計画段階では未だ誰もが経験したことのないものだからこそ、関わる人たちの柔軟性や主体性にプロジェクトの成否がかかっている。既成の価値観やルールで、できる／できないを判断すれば、すでにあるものの再生産しかできない。やったことのないことを、どうすればできるかを一緒に考えてほしい、と「共犯者」になることを僕は市の職員に求めた。3年間の中でこれについては驚くほどの変化があった。関わってくれたアーティストたちがその実践や作品をもって、主体的に関わることの愉しさを伝えてくれたということが大きいだろう。

プログラムのテーマに一貫して「生活」を謳ってきた背景には、個人的な問題意識が反映されている。僕がディレクターを担い、コーディネーターをその専門である妻が担ったのだが、普段から共働きで子育てをしながら、僕たちはアート業界における働き方改革を身をもって体現してきた自負がある。ときにアートといえば、時間を忘れて制作活動に没頭したり、条件を度外視してこだわりに徹することが美徳とされたり、（過剰な）夜のお酒を介した関係者との交流が、必要なこととして語られることがある。だが僕たち夫婦の間では、それらはすべて「言い訳」として非難されるものでしかない。僕たちの境遇でできることは、与えられた条件の中でも表現が可能なように緻密に計画することだ。準備にかかる時間を適切に見積もり、適材適所な人員配置を行う（上述の「柔軟性」とはこうした計画をしないことを意味するのではない）。言ってしまえば当たり前の対策で、制約のある中でも、APは形にすることができる。アートを特別なものと考えすぎると、それはいつまで経っても特別なものとしてしかあり得ないし、アーティストの新しい表現の機会という点だけが重視されると、それはわざわざ奈良で行う必要がないものになるだろう。

このようにアートを客観視したり生活について考えることは、アーティストとしての自分に対する自己批判でもある。今回アーティストと街をつなぐ役割を担う中で抱いた葛藤や衝突、ディスコミュニケーションについてはここでは語りきれないが、間違いなく今後の糧になる貴重な経験になった。

行政の主催であるからには、市民が文化に触れる権利を担保する一つの方法として、APを捉える必要がある。APを表現手法とするアーティストは当たり前のように街に必要な存在として、行政から「発注」を受ける立場になるというようなことも、回り回って十分あり得るだろう。そうしてAPを体験した人たちにとっては、あり得たかもしれない「生活」を生み出すきっかけになるはずだし、縦割りではなく横断的な思考・協働が必要になるこれからの行政にとってもそれは有効な「練習」として機能するだろう。奈良市APの継続に期待したい。

プログラムディレクター（演劇）
田上 豊
（劇作家・演出家・田上パル主宰）

奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」において、劇作家、演出家として舞台芸術の部門を担当し、十代のみなさんと多くの時間を過ごさせていただきました。ここに参加する中高生は、常に明るく活気に満ちており、そんな瑞々しい対象者と演劇の作品創りを行える喜びは、一言では言い表せられないものがあります。どの年度においても、個々人の驚くべき成長があり、演劇（時間の芸術）だからこそたどり着ける強さとユニークさが溢れる奈良の現場はとても刺激的な日々でした。

3年間の活動の中で創作したのは、「ならのはこぶね」、「奈良の夜の夢」の2作品。単なるプロとの創作体験で終わらないようディレクターとして目論んだのは、本番終了後に参加者達が「奈良の歴史により詳しくなっていること」、「人と対話をする力を身につけていること」の2点でした。そのために作品内に史実（主に奈良時代）の要素を内包させて歴史の再理解を促し、相互協力や双方向性を重要視するアクティブラーニングの手法を取り入れることで対話を誘発しやすい状況を作りました。たくさんの中高生達がこの取り組みによって成果を上げてきたことを考えると、社会包摂の精神で演劇に取り臨めば、生涯学習や人材育成にも生かせることを実証できたと思います。

さて、3年（「東アジア文化都市2016奈良市」を入れると4年）続けていると過去に関わってくれた子が大学生となって稽古場に遊びにきてくれることがあります。ビックリするほど大人びた雰囲気になって帰ってくるOB、OG達との再会を喜ぶ反面、「そうか、一緒に創作した時間というのは帰ってこないのだな」と切ない気持ちにもなります。そして、目の前にいる現役の中高生達に向き直り、この子達にとっても今の時間は大切な青春の一ページなのだと、気持ちを引き締めていました。「青少年と創る演劇」は、本番が終わると風のように去っていく演劇のように、十代の輝きを取り扱う儚く美しい創作とも言えます。

振り返れば、これまでの参加者達は、稽古や本番の中でたくさんの伝説を残してくれました。「衣装の緑のベスト着用拒否事件」、「お祭に巻き込まれ稽古場に帰ってこない事件」、「舞台本番直後の愛の告白事件」など、例を挙げだすとキリがないですが、その度にたくさん笑って、時々叱って、背中を押してあげたりしながら、誰一人脱落することなく舞台に関われるように尽力してきたつもりです。本当に毎年色々起きるので、稽古場に向かう夕方の三条通りは、私にとって日々の稽古プランを考えながら歩く試練の道でした。そして、稽古場の扉の前で一呼吸し、「この扉の先にはみんなが待っている。きらめく十代達が今日も演劇をやろうと待ち構えている」そう思いながら胸を高鳴らせ、気合いを入れた日々が懐かしい。あの扉の先は、いつの時も「輝く未来」がひしめき合っていて、まっすぐな喜怒哀楽と情熱に包まれていました。あんな魅惑的な3年間を経験できたことは、演出家冥利に尽きると改めて思います。

うっかり思い出話に終始してしまいましたが、最後に、3年間の継続性をもってアートプロジェクト事業を進めて頂いた仲川げん奈良市長、奈良市役所の皆さんに厚く御礼申し上げます。そして、これまでに創作を支えてくれた全ての技術スタッフにも心からの感謝を。様々な大人の下支えがあって、演劇のアートプロジェクトは成り立っていました。その献身的な姿勢と膨大な労力に敬意を表します。

鳴呼、我が麗しの奈良。この地でいつかまた演劇をやることがあるならば、その時も愉快に壮大にみんなでやろうではないか。奈良の全ての青少年と、その未来に幸あれ。このアートプロジェクトが末永く続き、いろんな人に豊かな時間や表現で還元されますように。





**西尾 美也**

1982年奈良県生まれ、同在住。美術家。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。文化庁芸術家在外研修員（ケニア共和国ナイロビ）などを経て、現在、奈良県立大学地域創造学部准教授。本事業のきっかけとなった東アジア文化都市2016奈良市「古都祝奈良」出展作家。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目した作品や日本とアフリカをつなぐアートプロジェクトを各地で展開している。



**田上 豊**

劇作家・演出家。田上パル主宰。富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督。1983年熊本県生まれ。桜美林大学文学部総合文化学科卒業。在学中に劇団「田上パル」を結成。方言を多用し、軽快なテンポと遊び心満載の演出で「揺らぐ人間像やその集団」を描き出すのを得意とする。中高生や大学生との創作、市民劇団や公共ホール事業への書き下ろしなど、様々な形で活動を展開。創作型から体験型、育成講座まで幅広くワークショップも行う。劇団青年団演出部所属。

※本書掲載のプロフィール等は開催当時のものです。
※撮影者クレジットのない写真は事務局による撮影。

事業概要

奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良2017－2018」
主催：奈良市アートプロジェクト実行委員会、奈良市
協力：奈良県立大学 地域創造学部 西尾研究室、See You（シーユー）奈良店、
rooftop ならまち染工房、柴田ビル、田上パル、青年団、プロトテアトル
平成29年度文化庁文化芸術創造活用プラットフォーム形成事業

［事業一覧］
チェ・ジョンファ「花 Welcome」2018年3月9日（金）－25日（日）
青少年と創る演劇「ならのはこぶね」2018年3月30日（金）

奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良2018－2019」
主催：奈良市アートプロジェクト実行委員会、奈良市
後援：奈良県、奈良県立大学
協力：奈良国立博物館、奈良市立富雄保育園、青年団、田上パル
平成30年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業

［事業一覧］
グリーン・マウンテン・カレッジ 2018年10月－2019年2月（全7回）
チェ・ジョンファ「花の舎利塔 Blooming Matrix」2018年11月17日（土）－29日（木）
青少年と創る演劇「ならのはこぶね」2018年12月23日（日・祝）

奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良2019－2020」
主催：奈良市アートプロジェクト実行委員会、奈良市
後援：在大阪インドネシア共和国総領事館、奈良県立大学
協力：一般財団法人奈良市総合財団、アンクルン音楽クラブ con brio、春日大社、
奈良市下御門商店街協同組合、奈良もちいとのセンター街協同組合、日本・インドネシア友好協会奈良、
平城宮跡管理センター、吉田勝紀、mellow cafe、青年団、田上パル
2019年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業

［事業一覧］
北澤潤「You are Me」2020年1月10日（金）－2月1日（土）
グリーン・マウンテン・カレッジ 2019年9月－2020年1月（全4回）
青少年と創る演劇「奈良の夜の夢」2019年12月21日（土）

平田オリザさんによる演劇ワークショップ

奈良市アートプロジェクト実行委員会

実行委員長
　仲川 げん（奈良市長）

実行委員
　佐々木 雅幸（大阪市立大学名誉教授、同志社大学客員教授、文化庁地域文化創生本部主任研究官）
　萩原 雅也（大阪樟蔭女子大学学芸学部教授）
　青木 幸子（税理士、青木幸子税理士事務所）
　中室 雄俊（奈良市教育長）

プログラムディレクター
　西尾 美也（美術）
　田上 豊（演劇）

事務局
　奈良市 市民部 文化振興課

## 奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良2017－2020」


発行　2020年3月
発行元　奈良市アートプロジェクト実行委員会
企画・編集　奈良市アートプロジェクト実行委員会事務局
編集　松永 大地
デザイン　赤井 佑輔（paragram）
写真　衣笠 名津美、濱田 英明、平岡 雅之、山口 健一郎、米田 真也
印刷　株式会社ヒラノ印刷



奈良市アートプロジェクト実行委員会
〒630-8580 奈良市二条大路南一丁目1番1号
E-MAIL art@city.nara.lg.jp / TEL 0742 34 4942 /　FAX 0742 34 4728
https://kotohogunara.jp/



文化庁　2019年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業